RITSUMEIKAN

NEWS LETTER

Mar.
2008
02

立命館大学グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」ニュースレター

Contents

赤間 亮
「日本版画と板本の美プロジェクト」 2

井上 学
「デジタル・ヒューマニティーズにおける地理情報の役割」 3

行事の記録 4

DH-JAC

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY [MEXT]
GLOBAL COE [CENTER OF EXCELLENCE] PROGRAM
DIGITAL HUMANITIES CENTER FOR JAPANESE ARTS AND CULTURES, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Staff Research

日本版画と板本の美プロジェクト ー浮世絵アーカイブの現場からー

赤間 亮（立命館大学大学院先端総合学術研究科・教授 /「日本文化研究班」リーダー）

本プロジェクトでは、江戸時代の出版・印刷文化についての研究を進めている。具体的な対象は、これまでも力を入れてきた、浮世絵や絵入板本はもちろんのこと、板木そのものや、合羽摺という京都や大阪でよく使われた彩色手法に及んでいる。これらの対象を通常の人文系の方法のみならず、デジタルアーカイブ技術を駆使して研究を進めていることが特徴となっており、そこがデジタル・ヒューマニティーズ（DH) プロジェクトに参加している所以でもある。デジタルアーカイブ技術といっても、いわゆる“技術開発”ではなく、すでに実用化された機器、ソフトウェアを駆使して効率よくデジタルコピーを生産し、デジタルファイルを様々に加工・整理して行くところに強みがあり、今回のグローバルＣＯＥ以前の大規模プロジェクト研究により培われたノウハウが生きてくる。

今回は、この内、浮世絵アーカイブについて述べてみたい。浮世絵については、今更言うまでもないことではあるが、日本国内から海外へ輸出され続けており、むしろ海外のコレクションの方が質量ともに優れていることが多い。本稿を書いているのは、2008 年 2 月末のニューヨークであるが、マンハッタンの中央、アジア協会博物館では、「DESIGNED FOR PLEASURE」という江戸初期から幕末までの作品を集めた展覧会が開催されている。同時に、これもまたその会場から歩いて行けるあるギャラリーでは、「Early Images from the Floating World」という日本のある著名なコレクターがかつて持っていた、初期浮世絵の重要な作品群を展示販売している。このコレクションは、50 年ぶりに世に出たものであり、いわば幻の作品をニューヨークで目の当りにしたことになり、私自身のショックも大きい。面白いのは、このコレクションが市場に出回ったのは、昨年の６、７月からであり、日本ではその段階ですでに話題を呼んでいたし、本拠点のアート・リサーチセンターも何冊か購入することができた。しかし、このギャラリーのオーナーに言わせると、それらは状態のあまりよくないものであり、従って日本からアメリカに持ち帰ってもあまり需要のないものだったのだそうだ。いかに海外に流れる作品群に名品が多いかが、この逸話からもわかる。

今回の滞在の目的は、ニューヨーク在住のあるコレクターのものを対象とした調査で、その邸宅の一室を借りて行っている。最終日の展覧会の打合せには、また別のコレクターも参加してきた。彼らは、日本語を読めないのにもかかわらず、自分のコレクションの立派なカタログを作っているのである。なぜ、それが可能なのだろうか。実は、海外の研究者やディーラーあるいは、コレクター自身の方が、日本人よりも多くの作品を見ているだけでなく、研究書や図録・目録も揃っているのである。日本語の読める研究者ももちろん多いが、読めなくてもその絵が何と呼ばれているものなのかどれだけの価値のあるものなのかはわかる環境が、実は揃っているのである。

この環境は、これまで日本にいては共有化が難しかった。それを可能としたのがデジタルアーカイブ技術なのである。現在は、文系のどの研究者も、調査には一眼レフのデジタルカメラを持参し、その場で資料を撮影する姿が見られるが、本プロジェクトの方法は全く違って、一つのコレクション全体をそっくりそのまま高画質 ー つまりその場で肉眼の調査記録や記憶するよりも、この複写画像の方が役に立つことが多い ーでアーカイブしてしまうのである。鑑定士やディーラー、学芸員、研究者の最初の仕事として、このデジタルアーカイブを実施しておくことで齎される結果は、そうしなかった場合と比べて大きな差が出てくる。展覧会の図録や展覧会開催前の宣伝（紙・WEB を問わず）は、あっという間に進んでいく。今回の調査の詳細には触れないが、2009 年度の始めに世界を驚かせることになると思う。デジタルアーカイブ技術とその活用によって、研究が飛躍的に進むものであり、本プロジェクトへの期待は世界から寄せられているため、本拠点に果す役割はきわめて大きいものと実感している。

1727 年頃の奥村政信の漆絵
（立命館大学 ARC 蔵）

（あかま・りょう　日本文化史）

Staff Research

デジタル・ヒューマニティーズにおける地理情報の役割

井上学　（本拠点 PD /「歴史地理情報研究班」）

私が所属する「歴史地理情報研究班」の特徴は、絵画や文章などに含まれる「時空間情報」をもとに、地図化することで様々な解釈を行うという点にある。時空間情報とは、史資料にある「いつ・どこで」という情報である。私が行っている研究を一例に、時空間情報のデジタル化と本拠点における役割を紹介したい。

（1）大正元年地積図のデジタル化から見えるもの

この地積図は、375 枚の紙地図と地番や土地所有者、土地等級などが記載された付録台帳から構成されている（図 1･2）。デジタル化にあたって、地図をスキャナで読み込み、デジタル化された画像から土地の境界をトレースした。この土地の境界は GIS ソフトを使用することで、現在のデジタル地図と重ね合わせが可能である。これによって、紙地図であった大正元年当時の京都の土地の境界が現在のデジタル地図と比較可能になった。一方、付録台帳は記載内容をすべてエクセルに入力した。

GIS ソフトは、紙地図に書かれている 1 筆ごとの情報（ここでは地番）を、トレースした土地の 1 筆ごとに入力することも可能である。この作業によって、デジタル化された地図にも、エクセルに入力された付録台帳にも共通の地番情報が与えられている。これをもとに、デジタル化された地図に付録台帳の情報を与えることが可能である。その結果の一例が図 3 である。図 3 は付録台帳にあった土地等級を表示している（赤色で高く表示されている場所ほど土地等級が高いことを示している）。当時は千本今出川付近も新京極付近と同様に土地等級が高いことがわかる。大正元年京都地積図のデジタル化はここで終了であるが、このデジタル地図データをもとに、大正元年前後のデータを加えることが可能である。現在進めているのは、昭和 12 年電話帳のデジタル化である。数字や住所・氏名・職業の羅列も、住所データを手がかりに上記のデジタル地図に落とし込めば当時の職業・商店分布が復原可能である。このように、過去の地図をデジタル化することで、その他の様々なデータを加えることが可能である。

（2）フィールドワークの効率化―PDA 調査法―

私たちはパソコンと向かっているだけではなく、フィールドワークによる京町家調査や路傍祠調査のデータ収集も行っている。しかし、フィールドワークにかかる労力や時間は大きく、データ記入のミスも多発する。そこで、 携帯端末（PDA）を活用した調査方法の確立を進めている。 この結果を町家や路傍祠に明るい分野の方々とコラボレーションすることでデジタル・ヒューマニティーズの進展を試みたい。

デジタル・ヒューマニティーズを料理にたとえるなら、時空間情報は器の素材であり、地図は料理を盛るための「器」といえよう。そして PDA 調査法は効率的な器作りである。地図に様々な情報を付加することで料理を盛っていくが、他分野からも時空間情報の重要さを認識していただき世界を唸らせるような料理が盛られることを期待したい。

（いのうえ・まなぶ　地理学）

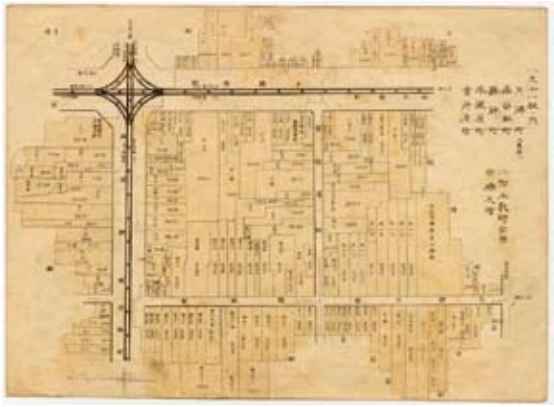

図 1 大正元年京都地積図（地図）

図 2 大正元年
京都地積図付録台帳

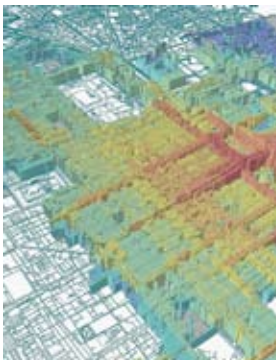

図 3 大正元年京都地積図における
土地等級の 3 D 表示

行事の記録

イベント（主催・共催）の記録

■［展覧会］「マキノ映画の軌跡」 2008 年 1 月 8 日～ 3 月 30 日　東京国立近代美術館フィルムセンター
■［展覧会］「陶器製地雷展　ー太平洋戦争末期の信楽焼ー」 2008 年 1 月 9 日～ 30 日　立命館大学・国際平和ミュージアム
■［講座］立命館土曜講座「＜特集＞新しい人文科学への挑戦　ー日本文化デジタル・ヒューマニティーズー」（全 3 回）　立命館大学・末川記念館
2008 年 1 月 12 日　當山 日出夫「デジタルがひらく文字研究の世界　ー『祇園』はどう書くか、景観文字研究の視点からー」
2008 年 1 月 19 日　倉橋 正恵「海外浮世絵研究の現状　ーボストン美術館の活動とデジタル化の意義ー」
2008 年 1 月 26 日　河角 龍典「3 次元デジタル地図でみる古代都市　ーバーチャル長岡京・平安京の構築ー」
■［展覧会］「映画プログラムの世界　ー映画で賑わう衣笠・西陣ー」 2008 年 2 月 1 日～ 3 月 16 日　立命館大学・国際平和ミュージアム
■［国際シンポジウム］「日韓の先史時代集落　ーGIS の可能性」 2008 年 2 月 17 日　立命館大学・アカデメイア立命 21
■［国際シンポジウム］「デジタル・ヒューマニティーズの可能性　ー日本近代文学・文化研究の立場からー」 2008 年 2 月 17 日　立命館大学・末川記念館
■［シンポジウム］「京都 vs. 江戸　描かれた京都と江戸を読み解く」 2008 年 3 月 1・2 日　立命館大学アート・リサーチセンター
■［展覧会］「実験考古学と民俗考古学の試み　ー乾山窯の復原と五条坂の民俗調査ー」 2008 年 3 月 10 日～ 4 月 11 日　立命館大学アート・リサーチセンター
■［シンポジウム］「乾山は何を求めたのか？　ー窯と技術から考えるー」 2008 年 3 月 23 日　京都文化博物館

GCOE セミナーの記録

会場：【衣笠】立命館大学アート・リサーチセンター　【BKC】立命館大学情報理工学部メディア情報学科会議室
■第 13 回　1 月 15 日（火）
濱田 裕司「デジタル映像での伝統文化保存」
関口 博之「知的診断支援　～人体データ・診断手法のデジタルアーカイビングとその応用」
■第 14 回　1 月 22 日（火）
斎藤進也「協調的なナラティヴの蓄積による日本文化アーカイヴの構築」
尾鼻崇「テレビゲーム音楽の研究　ーその構想と展望ー」

イベント、GCOE セミナーの最新情報は下記のサイトをご覧ください。
立命館大学・日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点 HP　http://www.ritsumei.jp/humanities/index_j.html
立命館大学アート・リサーチセンター HP　http://www.arc.ritsumei.ac.jp/
GCOE セミナー・告知ブログ　http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/seminar/

文部科学省グローバル COE プログラム
「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」
News Letter 第 2 号
2008 年 3 月 31 日発行

立命館大学アート・リサーチセンター
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL:075-466-3411
FAX:075-466-3415
http://www.arc.ritsumei.ac.jp/

お問い合わせ
立命館大学研究部人文社会リサーチオフィス GCOE 事務局
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL:075-466-3335
FAX:075-465-8245
E-mail:jdh-jimu@st.ritsumei.ac.jp